

ジャックと生きる木

生きる木復活大作戦!!

そろそろ生きる木を人間の姿に戻してあげたいんです。
それだけです。

ジャックと生きる木 第2シーズンの最初の物語！
お楽しみに！

ジャックと生きる木　生きる木復活大作戦!!

なっ

0　～プロローグ～ Chapter1　プロローグ

「で、愛美はこれからひまわりさんの研究に協力するって事でいいの?」

俺の名前はジャック。今更の自己紹介は不要だろうが、一応しておこう。
色々あって魔王の息子となり、色々あって時空を旅した。

「うん。私はひまわりさんと時空の調査をするよ」

「その、時空の研究って具体的にどんな感じなの?」

「うーん、過去に戻ったり未来に行ったりを円滑にするとかー……実際に過去に行かずに過去を変えたり……」

彼はひまわり。ひまわりさんと呼ばれている。

技術力が半端ない。何でもできる。

「じゃあさ、生きる木を人間に戻せるような研究も進めてよ!」

「生きる木君を人間に……確かに人間時代はかっこよかったしな……」

彼女は時板愛美。人間なのかそうじゃないのかはっきりしないが、時空を操る人。

俺は彼女に救われ……いや、むしろ殺されかけた。

「それはいいアイデアだね！　じゃあ、早速愛美さんと研究始めるよ！」

「あいみでいいよ」

もし、研究が上手くいけば、きっと生きる木が人間に戻れるだろう。
どうせ上手くいくだろうが。

1　　＼生きる木を人間に戻す話＼

Chapter1 別の世界

この、俺たちがいる世界とは別に「管理界（アドミン・ディメンション）」なる、何とも中二病全開な奴がつけたようなダサイ名前の世界がある。

管理界は、この世界の全ての権限を持っており、何でもできる。いわば、世界の管理者。

愛美は昔、ここに所属していた。……今はどうか知らないが、管理界で時空を操って……まあ、色々やって俺を殺しかけた。あれは相当大変だったな。

「じゃあ、ジャック君と愛美さんは、管理界で資料とかを集めてきてほしいな」

「うん。分かったよ」

愛美がいることで、管理界への出入りがほぼ自由になった。
セキュリティはガバガバだ。

「じゃあ行きますよう……」

そう愛美が言い、右手を壁にかざすと、扉が現れた。

「な、何これ……」

「これは管理ゲート。勝手口みたいな感じ。管理界の権限を持つ者は、いつでも・どこでも自由に扉を開いて、管理界にパパッと行くことが出来るんだ♪」

「へー……」

「興味なさそうだね……。あの時の生きる木君の気持ちが分かったよ……」

俺は扉に近づく。すると扉が開く。

「あっ、自動ドアなんだ……」

俺と愛美は扉へと入り、ゆっくりと歩いていく。

中は薄暗い。通路みたいな感じになっている。

「これ、いつになったら管理界に着くの？」

「ここは連絡道路なんだけど、ここを真つすぐ1時間ぐらい歩けば着くよ」

1時間？ そんなにかかるの！？

「私たちが通るときは、基本的に自分自身の時間の進みを速くして、3分ぐらいで歩き切るけど、ジャック君自身の時間の進みを速くしたら、ジャック君いなくなっちゃうかもしれないからね……」

自分自身の速度を20倍速くすることだよ……

「細胞が耐えられなくて……バーン!! って……なるかもだし……」

「表現怖っ……じゃあ歩くよ……」

「うん。私は先に行ってるね」

「えっ」

愛美がそういうと、光をまといながらとんでもない速さで走っていった。ってことは、俺一人だけでずっと歩かなきゃいけないのか……？

まあ、たまには散歩って事で歩くか……

Chapter2 到着！

長っ！！

1時間も歩いた。

流石に疲れた。

けど、なんとか到着した……

「あ、ジャック君！ お疲れ！」

誰のせいでここまで歩いたと……

「まあ、一緒に行動出来ないから仕方ないじゃん！」

あれ？ 今、声に出してたっけ？

「ここに帰ってくれば、私の権限もある程度復活するから、人の心も読めるんだよ！」
そうなのか。心が読めるようになるのか。

「で、ここで資料を集めるんだけど……この管理界には資料室とかあるの？」

「うん！ その突き当りを左に曲がって、その突き当りだよ！ 一緒に行こっか！」

「——それはちょっと待ってほしいな？ 愛美ちゃん」

ん？ 誰の声だ？

「あっ！ 裕美先輩！」

「お久しぶり、愛美！ そちらは……？」

「ジャック君だよ！ あの……E2A戦争の張本人の……」

「ああ、あのジャック君ね！」

「えーっ—えいち戦争……って何、愛美？」

「Human to Admin戦争。管理界と人間たちの戦争の事。正確にはジャック君と私の戦争なんだけどね！」

あ、あの戦いって、管理界の歴史に残るようなものだったの？

「で……その方は？」

「あ、自己紹介が遅れたね！ 私は福井裕美（ふくいゆみ）！ 裕美さんとかって呼んでね！ ……

で、愛美ちゃん！ ちょっとだけついて来てくれないかしら？ 会議があるから是非来てほしいんだけど……」

え、会議！？ 懐かしい！ 私も参加していいんですか！？」

「もちろん！ 是非愛美ちゃんに参加してほしいの！」

「じゃあ……ジャック君は一人で資料集めてもらえる？」

まあ、なんか会議とかするみたいだし、全然いいだろう。

「うん。全然大丈夫」

「じゃあ、私は会議に行ってくるね！」

「行ってらっしゃーい……」

Chapter3 資料集め

「これかな……？ いや、こっちかもしれないな……」

生きる木を人間に戻すためには、やっぱり過去に戻すような資料が欲しいよな……

「これは？ ……『対象の時間軸を操る』……？」

俺はページをばらばらとめくる。

「ふむふむ……」

時流紛の成分をうまく使えば、対象の状態を変化させることができるのか。

対象を過去の状態にしたり、未来の状態にすることもできる……ってことは、生きる木の姿を過去の状態に戻せばいいのか？

この資料をひまわりたんに見せれば、もしかしたら開発できるかもしれないな。
じゃあ早速、これを持ち帰るか。

でも、どうやって持ち帰るんだ？ カウンターとかから借りれるのか？

――天井には「この資料はいつでも持って帰れるよ:D」と吊り下げられている

あ、普通に持ち帰って良いんだ。

じゃあこれをバッグに入れて持って帰るか……

「あ、ジャック君！」

愛美だ。もう会議は終わったのかな？

「そう！　懐かしの会議してたんだけど、ついさっき終わったの！　で、そのバッグは何かしら？」

「え、これは時空に関する資料だけど……」

「そうなの？　ちょっと貸してくれる？」

「ん？　別にいいけど……」

「ありがとう！」

そう言っって、愛美が資料をばらばらとめくり始める。

そして、全部のページを読み終わると、資料をビリビリに破り捨てた。

「愛美!?　何してるの!？」

「さ、行こっか」

そう言っくと、愛美は管理ゲートを開けて俺を連れていく。

「ちよっと！　資料！　どうするの!？」

愛美は俺の言葉を聞かずに、俺を抱えて超高速で走る。

「ねえ！　愛美ってば！」

うっ……昔の記憶が……

——さあ、審判の時よ

——あなたは償いを受けなければならない

昔の事を思い出すと、頭が痛くなってくる……。

Chapter4 もみ消し

ものの数分で元の世界に戻って来た。

「なあ、愛美！　どうしたんだ？　ちょっとおかしいぞ！」

「あつ、ひまわり君！　ちょっと話があるんだけど……」

「ん？　愛美さん？　どうしたの？」

愛美は俺の事を完全に無視して、ひまわりたんと話し始める。

「ひまわり君の研究してるパソコン見せてくれる？」

「ん？　いいけど……」

そう言って、愛美はひまわりたんからパソコンを借りる。

俺は部屋の隅でゲームをすることにした。

多分、愛美は俺の事を完全に無視している。

そして……………洗脳されているのだろう。

裏には……………管理界が関わっているのだろう。

「って、愛美さん！ 何をしているの！ それは、初期化ボタンじゃないか！」

「ジャック君もひまわりたんも！ ちょっと話を聞いてくれるかしら？ もう時空の研究はしないほしいの。分かった？ 約束よ？」

これは完全に洗脳とかされているのだろう。

愛美は「時空の研究に協力する」って言ってたのに、研究をしないでほしいだなんて、あり得ない。

「分かった？ じゃあ、私はちよつと買い物に行ってくるね」

「ねえ、ひまわりたん……………ちよつと相談があるんだけど……………」

「奇遇だね……………僕もジャック君に話したいことがあるんだよ……………」

ひまわりたんの予想でも、愛美は洗脳されているらしい。

多分、これは確定だろう。

「で、ひまわりたん……………愛美がいなくても管理ゲート開ける？」

「うん。10分もあれば管理ゲート開いて、管理界にいけるよ」

買い物に行くって言ってたし、10分ぐらいなら大丈夫だろう。

「じゃあ、すぐに開いてくれる？」

「もちろん！」

～ 10 分後 ～

「ジャック君！ 管理ゲート開けたよ！ さあ行こう！」

「うん！」

そう言って、ひまわりたんが開いた管理ゲートに入る。

中は、さっき愛美が開いた管理ゲートと同じようだ。

「さあ、急ぐよ！ 第二の戦術、『オーバーキーパー』！」

自分とひまわりたんの体の周りにオーラが出て、走るスピードが何倍にも速くなった。

ってか、ひまわりたんの戦術をみるのは初めてだな……。

「この調子で走っていけば、もうすぐ着くよ!!」

2 ～新エ2A 戦争～

Chapter1 上層部の支配

やっぱり、戦術を使えば早く着く。

もう着いた。

「まず、愛美の洗脳は多分、上層部によるものだろう。だから、上層部と話をすればいいんじゃないのかなって思うんだけど……」

「じゃあ、まずは上層部のところに行こっか！」

ちようど、裕美さんがいた。

「あ、裕美さん！ ちょっと話があるんだけど……」

「ん？ って！ ジャック君!？」

「ちよつと話があるんだけどってば……」

「警戒モードをレベルFにシフトアップ！ ジャック君、動かないで！」

そういうと、管理界の各所の赤いランプが光り、ブザーが鳴り始める。そして、裕美さんは銃を俺に向けている。

なんで急にこうなったんだ!？

「そのひまわりみたいな花も！ 動かないでね！ 二人とも今すぐに収容するからね……」

このままじゃ……まずいっ！

「ひまわりたん！ 逃げろ！」

俺は大声で叫んだ。

「えっ、うん！ ジャック君……必ず助けに行くから……待っててね！」

「ちっ、逃げたか……ジャック君だけでも収容するか……」

そう裕美さんが言うのと、銃を俺に撃った。

うっ……………

あれ…………ここは？

「ジャック君……あなたは処刑されるわ」

えっ

「……なぜ愛美ちゃんの警告を無視したの…………？」

「ここは…………？」

「ここは収容室。これ以上、時空の研究をされると困るから、愛美にはちよつと洗脳させてもらつて、研究を止めるようにしてもらつたわ」

「ってことは…………」

研究を止めさせるために、愛美を洗脳して、今こうなつてゐるのか…………？

「ってか、なんで処刑されるの!？」

「当然、少しでも研究をした者の記憶を抹消させるためにも、処刑しなきゃってね…………まずは、ひまわりみたいな奴を探さなきゃね…………処刑はその後よ」

ひまわりたん……………ひまわりたんなら、きっと助けてくれる。

今は捕まらないでくれ……………頼む……………!

Chapter3 クラック

「警戒モードをレベルAにシフトダウンしました。職員は……………」
あれから数週間が経った。

急に、スピーカーからロボットの声が流れた。

ひまわりたんが捕まるまでは、多分警戒は解けないと思っていた。

なのに、警戒モードのレベルが下がったってことは…………捕まっちゃったのか？

「もう…………救いはないのか？」

「おい、どうなってるんだ！ 管理権限が使えないぞ！」

あれ？ 職員の人達が何か慌ててるぞ？

「管理サーバーがハッキングされたんだ！ サーバー室行くぞ！」

ハッキング…………ってまさか？

「無理だ！ サーバー室への入室権限すらも剥奪されてる！」

「お、お前ら！ 権限を返して欲しいか？」

ひ…………ひまわりたん！

やっぱりひまわりたんがハッキング…………いや、よくわかんないけど！

助かった！

「権限を返して欲しければ、ジャック君を解放して、愛美さんの洗脳を解け！
あ、あと…………つ

いでに研究許可も！」

「くっそ……権限がなければ何も出来ない……………仕方ないか……」

そう職員が言い、俺の牢の扉を開けた。

「愛美ちゃんの洗脳も解いたよ……植物科のみんなは凄いね……H2A 戦争を起しただけはあるね」

なんか認められてる？

とりあえず、平和解決しようだし、資料を持って帰りたいんだけど――

「――植物科の功績を讃えてパーティーでもしましょうか！」

いや、今すぐにでも帰りたいんだけど……なんなら生きる木の誕生日明日だし……

「ま、またの機会にお願いします！　じゃ、俺たちはもう行きます！　ね！　ひまわりたん！」

「うん！　生きる木の誕生日が明日だから！」

「そう……また遊びに来てね！」

管理界って、そんな軽いノリで行っていいの……？

ひまわりたんが、来る時と同じように管理ゲートを開く。

「ジャック君！　行くよ……第二の戦術、『オーバーキーパー』！　2分で帰るよ！」

「うん！　早く帰ろう！」

「よし、バックアップから研究データを復帰させて……」

「どうやら、研究続行できるらしい。」

「愛美は、植物科のロボビーのソファで眠っている。」

「洗脳が解かれたから、その反動だろう。」

「どう？ 続けられそう？」

「うん……これをこうして、資料の通りにプログラムを書いて……」

「研究続行どころか、もう完成させちゃいそうだ。」

「出来た！」

速っ

「このリストバンドを身につければ、姿だけを人の姿に戻せるよ！」

「そのリストバンドを俺がつけたらどうなるの？」

「姿を昔の状態に戻すって感じなのかな？」

「予想通りだと思うけど、高校一年生の姿になるよ！」

「まあ、需要はないな。」

「じゃあ、これを明日生きる木に渡そっか！」

「生きる木！ ハッピーバースデー！」

「わー！ みんなありがとう！」

「実は、生きる木にプレゼントがあるんだ！」

「えー 何！ 気になる！」

俺は、ひまわりさんの開発したリストバンドを生きる木に渡す。

「おお！ 何このリストバンド！」

「それは、つけると人の姿になれるんだ！」

「おお！ ちょっとつけてみるね！」

生きる木が、枝の一本にリストバンドを掛ける。

そういう感じでいいんだ。

リストバンドを掛けた瞬間に、生きる木が眩しく光る。

「うっ……眩しい……」

しばらくして、光が消える。

目の前には……棒人間がいる。

「まあ、なんとなく分かってたけど……誰も絵を描けないから、どうせ棒人間になるって思ってたよ……」

確かに、俺も棒人間なんだから、当然生きる木も棒人間になるだろう。

「多分、体の表面を過去の状態に戻したんだね………感じるよ」

「うん。体の表面を過去の状態に戻してるんだけど……感じるって、何が？」

「体の表面の細胞が若くなったから、色々なものが感じられるようになった気がする………敵の存在……」

敵……？ もう敵なんていないはずじゃ………ってか能力者にでもなったの？

「植物科の植物たちは、みんな能力者だよ？」

あ、そっか。

ってか、さぞ当たり前かのように心読むのやめて欲しいな……

「まずは、リストバンドを取って……」

さっきと同じように光が出て、木の姿に戻った。

この眩しい感じ、どうにかならないのかな……

「で……もう植物科に敵はいないって、俺も思ってたんだけど、これはまずいことになったかもしれない……」

「まずい……こと……？ そんなにヤバイ敵なの？」

「下手すれば世界滅ぼせるぐらいのヤバイ敵だよ……」

JLT 2.20 に続く……

△次回予告▽

生きる木を人間に戻すことに成功したジャック。

しかし、人間にもどった生きる木が新たな敵の存在を検知する。

「……こりや、本当にまづいことになったよ……」

敵とは一体何者なのか。植物科たちは大丈夫なのか!?

次回

「ジャックと生きる木 READIED:NAK」(JLT 2.20)

お楽しみに！